



Data

監督・脚本: ロベルト・アンドー
 出演: ミカエラ・ラマツオッティ
 / アレッサンドロ・ガスマン
 / レナート・カルペンティエ
 リ/ラウラ・モランテ/イエ
 ジー・スコリモフスキ/アン
 トニオ・カタニア/ガエター
 ノ・ブルーノ/マルコ・フォ
 スキ/レナート・スカルパ

👁️👁️ みどころ

邦題を見れば、「イタリア美術史上最大の闇」と呼ばれている「カラヴァッジョ盗難事件」の犯人捜しの映画と一瞬錯覚。しかし、原題を『名もなき物語』とした本作は、ゴーストライターを主人公にしたサスペンスもの！

最近ネタ切れ気味のゴーストライターに、「カラヴァッジョ盗難事件」に関する面白いネタを提供するこの老紳士は一体何者？プロデューサーが「こりゃ傑作だ」とほれ込むほどの脚本を、この女はなぜ書けるの？

しかし、名画を盗んだ本人(?)たるマフィアが赤裸々に内幕を暴露されたそんな脚本を知ると・・・？こりゃ面白い！そのスリルとサスペンスをタップリと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□この事件はイタリア美術史上最大の闇！■□

去る3月11日にWHO（世界保健機関）によって「パンデミック（世界的な大流行）」と宣告された新型コロナウイルスは、イタリアで最大の猛威を振るっている。その理由は多くの専門家(?)とりわけ人気漫画『テルマエ・ロマエ』の作者でイタリア在住20年の漫画家ヤマザキマリさんの話によれば、①イタリア人はとにかくおしゃべり好きで、常に誰かと大声でしゃべっている、②イタリア人は握手だけでなくハグやキスによってオーバーに接触する挨拶が常、③イタリア人は食事の前にも軽く一杯飲みながらおしゃべりする習慣がある。等だ。

そんな国、イタリアにおける「イタリア美術史上最大の闇」と呼ばれている事件が、1969年に起き、今も未解決の「カラヴァッジョ盗難事件」だ。イタリアは『ゴッド・ファーザー』3部作のとおり、マフィアが支配する国(?)だが、この事件にはそのマフィアが関与していると噂され続けてきたらしい。「カラヴァッジョ盗難事件」については、パ

ンフレットにある石鍋真澄氏（成城大学教授）の COLUMN 1 「パレルモの《キリストの降誕》をめぐって」と、岡本太郎氏（ライター、翻訳家）の COLUMN 3 「カラヴァッジョの懊悩に手を差しのべるアンドーの映画愛と笑み」が必読だ。

しかして、原題が『名もなき物語』なのに、邦題をそれとは似ても似つかぬ『盗まれたカラヴァッジョ』とした本作は、イタリアのマフィアが石川五右衛門のような盗人を働く映画？いやいや・・・。

■□■誰が脚本を？ゴーストライターは誰？■□■

ユアン・マクレガーが主演した『ゴーストライター』（10年）はアフガン戦争とイラク戦争を主導した元英国首相の自叙伝を書くことに挑むゴーストライターの物語だったが、元首相にはある疑惑で訴追の危機が迫っていたから、世間の注目は最高潮。したがって、真実を書くための調査で素人探偵の度が過ぎていくと・・・？そんなハラハラドキドキの物語が、単なるゴーストライターの枠を越えて展開した同作はメチャ面白かった（『シネマ 27』143頁）。本作の監督はイタリア人のロベルト・アンドーだが、パンフレットの「現実と空想の不可思議で不可避な結びつきに焦点を当てた物語」と題された監督インタビューで、「本作は映画についての映画だ。」と語っている。しかし、それは一体どういう意味？

本作冒頭に登場するのは、人気脚本家のアレッサンドロ・ベス（アレッサンドロ・ガスマン）。彼の書いた脚本は大人気だが、実はそのゴーストライターが映画製作会社の秘書をしている女性ヴァレリア・トラモンティ（ミカエラ・ラマッツォッティ）らしい。もちろん、これは2人だけの秘密だが、ヴァレリアは本心からそれを望んでいたから、この2人に限って「仲間割れ」の心配はなさそう。しかし、問題は近時ヴァレリアの構想がネタ切れ気味なこと。映画製作会社の社長（アントニオ・カタニア）から「締め切りを守れ。早く書け」と急がされているアレッサンドロは、それをそのままヴァレリアに伝え、ヴァレリアもそれなりの努力をしていたが・・・。

眼鏡をかけて事務室のパソコンに向かって座っている女性ヴァレリアは、いかにも地味で、これではまだ未婚なのも仕方ない。そんなヴァレリアは母親のアマリア（ラウラ・モランテ）と2人で暮っていたが、この母親は結構若作りの美人だし、娘との会話も何かと知的センスにあふれているから、アレレ。こりゃ、何かの伏線なの・・・？

■□■この老紳士は何者？彼が語るウラ話しは？■□■

本作では2人の主役とヴァレリアの母親が紹介された後に、『ナポリの隣人』（17年）（『シネマ 43』128頁）で老弁護士役を好演したレナート・カルペンティエリが謎めいた老紳士ラック役で登場し、ネタ切れ気味のヴァレリアに対して、カラヴァッジョの名画「キリスト降誕」の盗難事件がマフィアの仕業だったというウラ話をしていくシークエンスが「劇中劇」の形で進められていくが、これが実に面白い。ヴァレリアがそれをプロットにまとめ、アレッサンドロが書いた脚本として提出すると、プロデューサーは「みんな集まれ、傑作の誕生だ！」となったから、万々歳。「タイトルは？」と聞かれたアレッサンドロは、

咄嗟に「名もなき物語」と答えたが、プロデューサーはその出来栄えに大興奮し、直ちに映画化を決定！その監督には引退を表明していた巨匠クンツェ（イエジー・スコリモフスキ）が就任し、中国から多額の製作費が出資されることも決定したからさらにすごい。

しかし、ヴァレリアがアレッサンドロの脚本として提出したこのプロットの真の出所はあの老紳士。彼はなぜそんな物語を思いついたの？ヴァレリアは当然それをラックに対して突っ込むべきだが、なぜか本作ではそれは後回しに……。それは、ひとえに本作を監督するとともに、脚本を書いたロベルト・アンドーのテクニックだ。しかし、「名もなき物語」が話題を呼ぶにつれて、なぜ俺たちが50年前にウラのウラでやったカラヴァッジョ盗難事件のことが映画の脚本の中に表現されているの？盗難事件に現実に関与したマフィアたちが、そう驚き、脚本を書いたアレッサンドロに追及の手を伸ばしたのは当然だ。

その結果、ある日アレッサンドロはマフィアたちに拉致され尋問されたが、彼はゴーストライターがヴァレリアであることをしゃべってしまうの？それとも……？

■□■ミスターXは誰？老紳士との共闘の行方は？■□■

アレッサンドロを拉致して尋問したにもかかわらず、思うような成果を得られなかったマフィアは、用済みのアレッサンドロの死体をどこかに始末するだけ。私はそう思っていたが、アレッサンドロは昏睡状態に陥ったまま空港の駐車場で発見されたから、アレレ……？これは、きっとこれ以上カラヴァッジョ盗難事件をめぐる映画製作を続ければ、関係者はみんなこうなるぞ、というマフィアからの警告だ。そう理解すれば、昏睡状態のアレッサンドロの看病を続けているヴァレリアは以降、ゴーストライターに徹して出しゃばらず、沈黙を守るべき！？もちろん、そうなれば映画製作は頓挫してしまうが、それは秘書に過ぎないヴァレリアは知ったことではないはずだ。

ところが、ロベルト・アンドー監督の脚本では、その後ヴァレリアはそれとは正反対に“ミスターX”と名乗り、アレッサンドロのパソコンを使って新しい脚本を書きそれをプロデューサーに送ったからアレレ……？これは、ラックから聞くカラヴァッジョ盗難事件の真相がメチャ面白いからだ、そんなことを続けて、アレッサンドロは大丈夫なの？アレッサンドロの追及に続いて今度はマフィアからミスターX＝ヴァレリア が追及されて拉致されたり、ミスターX＝ヴァレリアと共闘している老紳士ラックにも命の危険が及ぶのでは……？

■□■ネタバレ厳禁だが、想像力を駆使すれば……■□■

『ネタバレ厳禁！』を全面に押し出したボン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）における、後半から始まる怒涛の展開は全く想定外のものだった。しかし、本作は邦題の『盗まれたカラヴァッジョ』として観れば違和感があるものの、原題の『名もなき物語』として観れば、ゴーストライターの物語だということがわかるから違和感が少ない。その上、本作でもネタバレ厳禁とされているいくつかのポイントは、想像力を駆使すれば、ある程度想定することも可能だ。本作で想像力を駆使するポイントの1つは、前述したヴ

ヴァレリアの母親アマリアが妙に知的なこと。そして第2のポイントは、ラックがいくら謎の老紳士とはいえ、あまりにヴァレリアのことに詳しくかつあまりにタイミングよくヴァレリアに接触してくることだ。そんなことをあれこれ考えると、ひょっとしてヴァレリアとこの老紳士の関係は・・・？

そんな風に想像力を巡らせていると、さすがマフィアの情報網はすごいし、彼らの実行力もすごい。サスペンス映画ではよく、テレビを見ているとそこにある人物が殺害されたというニュースが飛び込んでくるシーケンスがあるが、本作もまさにそれ。ある日ヴァレリアがテレビを見ていると、ラックが死体で発見されたというニュースが流れてきたから彼女の恐怖はピークに……。他方、アレッサンドロは昏睡状態が続いていたが、そのままでは次の展開にならないので、映画としてはアレッサンドロがその後回復するのか、それとも死んでしまうのかのどちらかではっきりさせるはず。そのように想像力を駆使していると、案の定……。

『盗まれたカラヴァッジョ』という邦題とは似ても似つかぬ、2人のゴーストライター(?)を主人公にしたスリリングなサスペンス映画たる本作では、これ以上ネタバレになる評論を書けないのが残念だが、この後はあなた自身の目でしっかりと。

2020 (令和2) 年4月5日記